土佐日記

作者

紀貫之

「土佐日記」で「ある人」の歌とされている作が「後撰和歌集」には貫之作として採られており、「恵慶法師集」には「つらゆきがとさの日記」とある。「後撰和歌集」は貫之の息子時文が撰者の一人として参加しており、恵慶も時文と交流があったことが確認できる人物であることから、「土佐日記」の作者を紀貫之とする所伝は信じてよい。

▼生没年

未詳。貞観十四（八七二）年前後～天慶八（九四五）年前後。

▼家系・出自

紀氏は武内宿禰の子、紀角宿禰の子孫と称する古代屈指の雄族であったが、貞観八（八六六）年の応天門の変で紀夏井が連座したこともあって、以後は衰えた。武門の伝統を伝える一方で、惟喬親王を囲む文学サロンを在原業平とともに形成した有常、文人貴族の長谷雄、古今和歌集真名序作者の淑望らを輩出するなど、学問・文芸の方面でも活躍した。

貫之の父は望行。六位の卑官であった。母は未詳である。

▼官歴

延喜十七（九一七）年叙爵、加賀介、同十八（九一八）年美濃介、延長八（九三〇）年土佐守など、地方官を歴任し、承平五（九三五）年帰京。天慶三（九四〇）年玄蕃頭、同六（九四三）年従五位上、同八（九四五）年木工権頭。四十代も遅くなっての叙爵、極官が従五位上とは、官人としては恵まれなかったと言える。

▼業績

寛平四（八九二）年頃開催とされる「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」に見える歌が、現在確認できる最も古い貫之歌である。二十代から三十歳頃までにはすでに歌人として認められていたらしい。延喜五（九〇五）年には最初の勅撰和歌集「古今和歌集」の撰者の中心人物として、仮名序を執筆し、和文によって和歌の理論を展開した。入集歌数も第一位で、歌壇の第一人者として、この頃から貴顕の依頼に応じての屏風歌を詠むことが多くなった。それらは「貫之集」に収められている。同七（九〇七）年、宇多上皇の大井川行幸に従い九題九首の和歌と仮名による「大井川行幸和歌序」とを献じ、同十三（九一三）年「亭子院歌合」「内裏菊合」に出詠。延長七（九二九）年に醍醐天皇の勅を受けた「新撰和歌」を土佐在任中に完成（ただし醍醐天皇が崩御したため手元に留めた。）、承平五（九三五）年の帰京以降、「土佐日記」を完成させた。天慶二（九三九）年「紀貫之家歌合」を催した。宇多天皇の主導により和歌が宮廷文芸として復興の兆しを見せる中での登場以来、歌壇の第一人者として、和歌を漢詩と並ぶ公的文芸の位置

に押し上げるとともに、仮名散文による文芸の可能性を切り開いた。勅撰集入集約四百五十首、作歌総数は千首を超える。

出典

▼底本

新日本古典文学大系「土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記」（長谷川政春他校注、平成元〔一九九〕年、岩波書店刊）によった。「土佐日記」は長谷川政春校注、東海大学付属図書館蔵（桃園文庫旧蔵）青谿書屋本を底本とし、藤原定家筆本・宮内庁書陵部蔵本・三条西家本・近衛家本によって補訂している。

▼諸本

貫之自筆本は十五世紀末までは確実に存在したが、以後の消息は不明である。それを藤原定家、藤原為家、松木宗綱、三条西実隆の四者が書写したうち、藤原定家書写本、藤原為家書写本が現存している。作者自筆本こそ失われているものの、自筆本からの転写本が二本も現存しているというのは古典文学作品としては類を見ない僥倖であり、これらの本によって作者自筆本の姿がほぼ復原できる。

▼書名

現存写本ではいずれも「土左日記」と書かれている。前記「恵慶法師集」に「とさの日記」とあることから、古くは「の」を入れて読んでいたらしい。書名の意味を、①土佐守の日記とする説と、②土佐からの旅の日記とする説があるが、①説は全編を女性の手になるものとする建前と矛盾するし、②説は土佐からの旅であることが作中に明記されていないことにそぐわない感もある。

▼成立

平安中期、作者が任国土佐から帰京した承平五（九三五）年二月十六日以後まもなく、遅くとも帰京後初めての任官である玄蕃頭就任の天慶三（九四〇）年までに、帰京の旅中のメモなどを頼りに執筆されたと想定される。

▼内容

女性に仮託した作者による旅日記。任期を終えた国司が某年十二月二十一日に任地を離れるべく門出した記事から、翌年二月十六日に帰京するまでの五十五日間にわたる日次の記で、歴史上の事実としては前土佐守紀貫之が承平四（九三四）年から翌年にかけて、任地から帰京した旅にあたる。国司交代の事務引継ぎや送別の際の人々の言動、船旅における悪天候、海賊の悩み、自然の景観、土佐在任中に亡くした女子への哀傷、人情への批判などを述べる中、随所に和歌を盛り込み、歌論的な評言も差し挟む。内容は多岐にわたり、主題や執筆の動機を一つに絞るのは困難であるが、亡児悲傷など、全編に見られる喪失感が、土佐在任中に醍醐天皇、藤原兼輔ら庇護者を次々に失った日記執筆時の貫之の状況と通じる点があることによって注目される。

参考文献

❇ **教師用**

▽**注釈書**

日本古典文学大系「土佐日記　かげろふ日記　和泉式部日記

更級日記」鈴木知太郎　岩波書店　昭三十二
新日本古典文学大系「土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記」長谷川政春他　岩波書店　平元
日本古典文学全集「土佐日記　蜻蛉日記」松村誠一　小学館　昭四十八
新編日本古典文学全集「土佐日記　蜻蛉日記」菊地靖彦　小学館　平七
新潮日本古典集成「土佐日記　貫之集」木村正中　新潮社　昭六十三
日本古典評釈全注釈叢書「土佐日記全注釈」萩谷朴　角川書店　昭四十二
「現代語訳対照　土佐日記」村瀬敏夫　旺文社　昭五十六
「土佐日記　全訳注」品川和子　講談社　昭五十八
「土佐日記　訳注と評論」今井卓爾　早稲田大学出版部　昭六十一
日本の文学　古典編「伊勢物語　土佐日記」中田武司　ほるぷ出版　昭六十一
「土佐日記」川瀬一馬　講談社　平元

▽**研究書**

王朝の歌人「紀貫之」藤岡忠美　集英社　昭六十
日本の作家「宮廷歌人　紀貫之」村瀬敏夫　新典社　昭六十二
「古典の批判的処置に関する研究」池田亀鑑　岩波書店　昭十六
「土佐日記総索引」日本大学文理学部国文学研究室編　日本大学人文学研究所　昭四十二
「土佐日記の地理的研究―土佐国篇―」竹村義一　笠間書院　昭五十二
「土佐日記の風土」清水孝之　高知市民図書館　昭六十二

▽**入門書・研究案内**

日本文学研究資料叢書「平安朝日記Ⅰ」日本文学研究資料刊行会編　有精堂　昭四十六
研究資料日本古典文学「日記・紀行文学」大曾根章介・久保田淳他　明治書院　昭五十九
新潮日本古典文学アルバム「伊勢物語・土佐日記」片桐洋一　新潮社　平二
「紫式部の蛇足　貫之の勇み足」萩谷朴　新潮社　平十二

❊**生徒用**

「土佐日記―付現代語訳」（角川ソフィア文庫）三谷栄一　角川書店　昭三十五
「土佐日記」（岩波文庫）鈴木知太郎　岩波書店　昭五十四
「竹取物語・土佐日記」（新明解古典シリーズ）桑原博史　三省堂　平二
「要説　土佐日記」日栄社編集所　日栄社　平十一
「すらすら読める土佐日記」林望　講談社　平十七
「文法全解　土佐日記」（古典解釈シリーズ）丸尾芳男　旺文社　平十七
「土佐日記（全）」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）西山秀人　角川学芸出版　平十九
「紀貫之」（ちくま学芸文庫）大岡信　筑摩書房　平三十

図版解説

〈北野天神縁起絵巻〉

九州国立博物館蔵。南北朝時代（一四世紀）。絵巻。一巻。紙本著色。菅原道真の一生、怨霊となった道真の祟り、天神を信仰するものに与えられる利益、天満宮創建の由来、などから成る。本図は、道真が九州に下って行く海陸の旅路を描く。⇩P73

〈光琳かるた〉

大石天狗堂蔵。江戸時代中期。歌かるた。尾形光琳（一六五―一七一六）筆。琳派を代表する画家・工芸意匠が制作した、鮮明な色彩、巧緻な絵に金を効果的に使用した豪華絢爛な小倉百人一首かるた。⇩P77

〈藤原為家自筆嘉禎二年古写本『土佐日記』〉

大阪青山歴史文学博物館蔵。古写本。国宝。藤原為家（一一九八―一二七五）が嘉禎二（一二三六）年に、蓮華王院にあった紀貫之自筆の土佐日記を一字も違えずに書写したもの。貫之自筆本は現在に伝わらず、原本の姿を最も忠実に伝えている為家自筆本は、学術文献資料としての価値が非常に高い。⇩P84